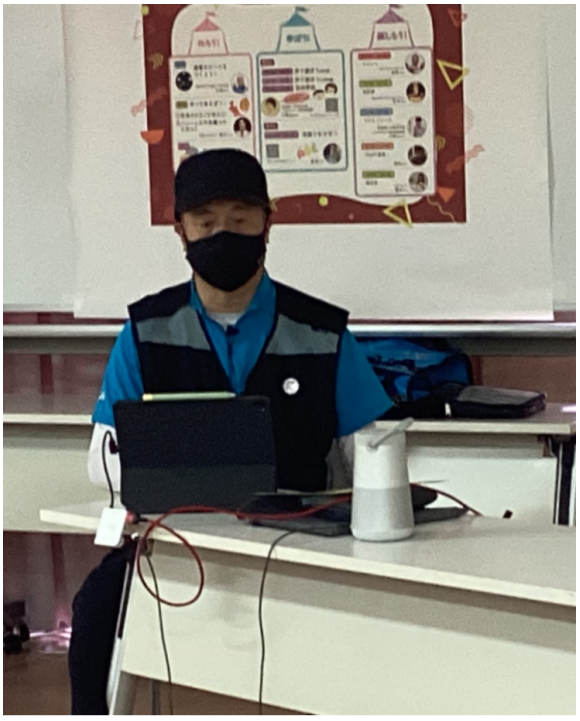
リード芦屋新聞

発行元
芦屋市立
あしや
市民活動
センター
リードあしや

記事
吉原大翔

音楽と歩む日々

岡田明彦さんとＤＴＭ



精道中学校で校務として働いている岡田明彦さん（６３）はＤＴＭ（デスクトップミュージック）という手法で楽曲の制作に取り組み、中学生にもその技術を伝える。芦屋市で一番好きな場所は、職場である精道中学校という岡田さん。ＤＴＭに関わり始めたきっかけと、今を生きる中学生たちへの思いを取材した。

岡田さんは高校時代、友人のギター弾き語りを聴いたことをきっかけにして、音楽に関わり始めたという。

中学校の校務員として働いてきた岡田さん。５０代に突入したある日、「今の音楽はどうなっているのだろう」と疑問を抱き、機材探しをしていく中で、島村楽器らぽーと甲子園店の店長さんに出会った。

店長さんに教えられたのが、ＤＴＭ（デスクトップミュージック）だった。パソコンやｉＰａｄなどコンピューターを使って音楽をつくりだす手法。ライブ活動をしなくても、ＹｏｕＴｕｂｅに動画をアップしたり、１人でギターを弾くだけでなく他のパートの音楽も自分で組み合わせて、合奏することができる。

この出合いがきっかけとなり、岡田さんはＤＴＭについての勉強に没頭していった。

校務員として中学生と交流

精道中学校の校務として働く中で、新型コロナウイルス流行前は昼休みになると子どもたちが岡田さんの部屋の前に集まってきて、ギターの弾き方やＤＴＭについて教えてほしいと言ってきた。その質問一つ一つに丁寧に答え、ｉＰａｄを使うと合奏ができるということを説明していた。

当時は学校教育の現場にＩＰａｄや音楽のことだけに限らず子どもたちからは、山の地図の見方や、方位磁針の使い方などを質問されることもあるという。一つ一つのことに答え、それらを使った実習を一緒にしているという。

トライやる・ウィークで受け入れ先が定休日の日、岡田さんは先生に頼まれて子どもたちと一緒に学校で活動をする機会があった。会話の中で、先生のことが話題となり、盛り上がった。すると生徒が本当に悩んでいることを打ち明けるようになり、悩みを聞いてアドバイスをして、生徒と信頼関係が築かれた。担任の先生が知らないようなことも知るようになり、驚かれることもあったという。

「学校の先生と違い、校務の仕事はノルマがなく、子どたちのやりたいことをできるのが利点だ」と語った。

日々、勉強と挑戦

子どもたちのため、私のために

一人一台ｉＰａｄが導入されるのは遠い未来の話だと考えていた。さまざまな事情によりｉＰａｄが一人一台導入されたのが２０１９年。その直後、新型コロナウイルスよって一斉休校となり、生徒に使い方を教える場がなくなってしまったという。

休校措置になってから岡田さんは、ｉＰａｄのＧａｒａｇｅＢａｎｄというアプリから、レベルの高いＭａｃのＬｏｇｉｃｐｒｏというソフトへと移行したという。レベルの高いものに触れ、新しい技術を学ぶことで、ｉＰａｄに戻ったときに教えられる幅が増えていくと考えて、日々努力をしているという。

聞かれた質問に答えるために、勉強や練習をしている。「子どもたちのためにやっているように周りからは見えるかもしれないが、全部私のため、全て私の助けになっている」と岡田さんは言う。